≪「**報告書詳細版**」は巻末の付録USBメモリに収録しています≫

第11部

医療・災害医療現場での情報技術活用技術の研究（概要版）

奥村 貴史、前田 貴匡、中河 清博

第１章　はじめに

社会の高齢化による医療需要の増大により、我が国の医療費が40兆円を超えた。深刻な財政難にある我が国において、国民皆保険制度を維持するためには、医療費の抑制は避けることが出来ない。一方で、社会は医療に対して、高い専門性や良い医療サービスを継続的に求めている。医療過誤等においては、限られた人材や医療費の制約のなかで医学的にベストを尽くした医療従事者に対しても多くの社会的非難が向けられる。このように、医療に求められるコストを社会が負担しないまま医療に高いサービス水準を要求することで、医療従事者の労働環境は悪化を続けていると考えられる。

第２章　WGの目標

情報技術は、本来、そのような苦境に喘ぐ医療現場の負担軽減に寄与すべきである。しかしながら、国が進める医療の情報化政策は、医療現場の負担軽減に繋がらないばかりか、情報システムへの情報入力の増大等を通じて医療現場の負担を逆に押し上げる結果を招いてきた。Medical Crisisワーキンググループは、こうした医療における危機的状況に対する情報技術の貢献について検討するために、2010年4月に設立された。

第３章　2016年の活動

7年目となる今年度は、i) 情報処理推進機構「未踏IT人材発掘・育成事業」の関係者により設立された一般社団法人未踏におけるMedical crisis研究会の立ち上げ、ii) 未踏事業を通じた開発者コミュニティに対する医療用情報技術の課題と解決策に関する情報提供、iii) 熊本地震対応を通じた災害情報系研究活動、iv) 政府による新型インフルエンザ対策への支援、v) 地域医療の情報化に向けた研修に関連する調査を行った。

第４章　おわりに

WG設立から、今年度で7年目の年度となった。医療の適切な情報化に向けては、国内に人材が欠如しており、また、政策の評価体制が整っていないことで、政策としての失敗が続いてきた。この問題に対して、WG活動を通じた貢献を模索してきたが、メンバー数的な制約と活動予算面での制約が大きく、限界があった。とりわけ、WIDE全体において新規の加入や合宿参加者の減少傾向があることから、WG単独での努力には限界がある。そこで今年度から、IPAの未踏等、若い人材が継続的に参加するコミュニティとの接続を試みた。今後、問題意識を共有するコミュニティを広げることで、活動の拡大を図りたい。